

富山市科学博物館研究報告第31号(2008)

要旨集

原 著

<生物系>

- 布村 昇：富山県南砺市のモグラの巣穴から発見された陸産等脚目甲殻類の2新種（英文）
- 布村 昇：長崎県志々伎湾産等脚目甲殻類(1)ーヘラムシ亜目、ウオノエ亜目、
コツブムシ亜目、キクイムシ亜目及びワラジムシ亜目（英文）
- 布村 昇・佐竹潔・上野隆平：小笠原諸島母島の淡水域から発見された
陸産等脚目甲殻類の1新種（英文）
- 津下麻樹：島根県宍道湖から発見されたフナムシ属（甲殻綱、等脚目、フナムシ科）
の一新種（英文）
- 根来 尚：小矢部市内の農耕地での訪花昆虫調査
- 根来 尚：氷見市島尾海岸の訪花昆虫調査
- 佐藤 卓：チョウセンゴヨウ (*Pinus koraiensis* Siebold et Zucc) の針葉の地理的変異

短 報

- 田中 豊：富山市八尾町西神通産の軟体動物化石（予報）
- 太田道人：富山県新記録の植物 19
- 南部久男・石川 創・山田 格・田島木綿子・谷田部明子・台蔵正一：富山湾における鯨類の記録（2007）
- 南部久男・後藤優介：東海北陸自動車道（富山県南砺市）で交通事故死したニホンツキノワグマの年齢
- 朴木英治・渡辺幸一：立山における酸性雨観測結果 2006

資 料

- 田中 豊・市川真史：平成19年（2007年）能登半島地震の際に生じた富山県内の液状化現象
- 太田道人：都市河川「いたち川」の護岸上に生育する植物リスト
- 南部久男：1953年の富山県におけるツキノワグマの大量出没記録
- 南部久男：富山県におけるツキノワグマの出没記録（2007年）
- 二橋 亮・二橋弘之・和田茂樹：富山県のトンボ（2007年度記録）

原著

富山県南砺市のモグラの巣穴から発見された 陸産等脚目甲殻類の 2 新種

布村 昇

京都大学名誉教授相良直彦博士が富山県南砺市福光才川七ならびに南砺市福野安居寺のモグラの穴から採集された陸産等脚類 2 種はオオハヤシワラジムシ (*Lucasioides*) 属の新種であった。1 種目はトヤマハヤシワラジムシ *Lucasioides toyamaensis* として記載した。2 種目はモグラアナワラジムシ *Lucasioides sagarai* として記載した。両種の模式標本は富山市科学博物館におかれる。

長崎県志々伎湾産等脚目甲殻類(1)

ヘラムシ亜目、ウオノエ亜目、コツブムシ亜目、キクイムシ亜目及び ワラジムシ亜目

布村 昇

東幹夫博士(調査当時は長崎大学)が 1984 年など長崎県平戸市志々伎湾で行った底生生物の一連の生態学的調査で採取された等脚目甲殻類標本を調査した。また、筆者が同海域の潮間帯の調査を行ったのであわせて報告する。今回は第 1 報としてヘラムシ亜目、ウオノエ亜目、コツブムシ亜目、キクイムシ亜目、ワラジムシ亜目などを調査したところ 33 種を確認した。うち、*Symmium azumai* [アズマヤリボヘラムシ] *Neastacilla longipectus* [ムネナガヒメナナフシ] *Arcturina plumbioformis* [ハトガタヒメナナフシ]、*Eurydice saikaiensis* [サイカイナギサスナホリムシ]、*Metacirrolana shijikiensis* [シジキスナホリムシ]、*Sphaeroma rotundicaudum* [マルオコツブムシ]、*Limnoria hiradoensis* [ヒラドキクイムシ] の 7 種が新種あることが判明した。特に *Arcturina* 属はアフリカからインドにかけてのみ知られていたが、日本からの初めての発見である。模式標本は 富山市科学博物館におかれる。

小笠原諸島母島の淡水域から発見された 陸産等脚目甲殻類の 1 新種

布村 昇

佐竹潔・上野隆平 (国立環境研究所)

2007 年 3 月 1 日、母島の乳房ダムの水中のアカギの根茎からコシビロダンゴムシが採集された。本種は *Spherillo* 属の新種であり、*S. hahajimensis* として記載した。本種の模式標本は 富山市科学博物館で保管される。本種はダム湖の水中にあるアカギの根茎から採集されたが、*Spherillo* 属からは水生の種は報告されておらず、本来は陸生の種が水位の上昇に伴ってアカギの根茎に取り残されたものではないかと考えられる。また調査時には他の 5 地点から確認されておらず、採集地点は通常は地表流が認められないが、降水が多いときには地表流ができると想定される谷地形に存在する。陸生の等脚目甲殻類は一般に水中でもしばらく耐えられるとされているが、本種は水中生活により適応している特徴を持っている可能性がある。

島根県宍道湖から発見されたフナムシ属(甲殻綱、等脚目、フナムシ科)の 1 新種

津下 麻樹 (いであ株式会社・環境創造研究所)

従来、日本におけるフナムシ属は 7 種が記録されていた。今回、島根県の宍道湖から第 8 番目の種が発見された。宍道湖は、大橋川を介して中海と連なる代表的な汽水湖として知られている。本論文では、この種を *Ligia shinjiensis* (シンジコフナムシ:新称) として報告する。模式標本は富山市科学博物館に保管される。

小矢部市内の農耕地での訪花昆虫調査

根来 尚

4 月から 11 月間の 8 日間の調査の結果、6 目 3846 個体の昆虫の訪花が確認された。最も多かったのは双翅目で全個体数の 45%1713 個体、次いで膜翅目の 32%1210 個体、鱗翅目 17%641 個体、甲虫目 5%205 個体と続き、半翅目、直翅目の 2 目はたいへん少なかった。

昆虫の訪花が確認された植物は 27 科 60 種である。キク科を訪れた昆虫は 6 目 2296 個体で最も多く、次いでマメ科 6 目 720 個体、ヤナギ科 4 目 106 個体、カタバミ科 5 目 105 個体、タデ科 4 目 91 個体、キンポウゲ科 5 目 90 個体、キツネノマゴ科 4 目 75 個体、ツユクサ科 4 目 75 個体が多い科であった。

最も訪花個体の多かった植物は、ヒメジョオン、セイタカアワダチソウ、アカツメクサ、シロツメクサ、ハルジオン、セイヨウタンポポ、アキノノゲシ、タチヤナギ、カタバミ、ヒメムカシヨモギが上位 10 種で全個体数の 77%を占める。10 種中 7 種が帰化植物である。

7 月と 10 月に訪花個体数のピークがあり、7 月が全個体の 23%892 個体で最も多く、10 月は 17%667 個体であった。7 月、10 月ともにピークは主に双翅目特にハナアブ類による。

氷見市島尾海岸の訪花昆虫調査

根来 尚

4 月～10 月間の 7 日間の調査の結果、6 目 2196 個体の昆虫の訪花が確認された。内訳は、膜翅目 1149 個体、双翅目 801 個体、鱗翅目 78 個体、甲虫目 94 個体、半翅目 50 個体、直翅目 24 個体であった。

膜翅目中ではハナバチ類、双翅目中ではハナアブ類、鱗翅目中ではチョウ類、甲虫目ではコガネムシ類が大部分を占めた。

25 科 46 種の植物への訪花が確認され、内キク科が 9 種で最も多かった。

訪花個体数は、キク科 414 個体、バラ科 330 個体、セリ科 287 個体、ブドウ科 274 個体、ヒルガオ科 250 個体が多い科であった。ハマボウフウ、ハマヒルガオ、ハマナス、ハマニガナ、ハマダイコン、ソメイヨシノ、ハルジオン、ハマゴウ、ウンランが上位十種であった。

6 月と 9 月に訪花個体数のピークが認められ、6 月が 618 個体で最も多く 9 月は 362 個体である。6 月 9 月ともにピークは主に双翅目による。

チョウセンゴヨウ(*Pinus koraiensis* Siebold et Zucc)の針葉の地理的変異

佐藤 卓 (富山県立桜井高等学校)

極東アジアにおけるチョウセンゴヨウの地理的変異を解析した。解析に用いた形質は針葉の解剖学的性質、球果と種子のサイズである。針葉形質を用いたクラスター分析では、日本の白根山と鈴蘭高原の2集団のクラスターと、中国、韓国、シベリア、日本の他の集団を含むクラスターに分けられた。針葉の厚みを示す形質、樹脂道数、鋸歯密度は標高と正の相関が認められ、樹脂道の直径と背軸側樹脂道間距離と内皮鞘直径の比は緯度と正の相関が認められた。球果と種子(厚みを除く)のサイズは経度と正の相関が認められた。また、球果のサイズは年降水量と負の相関が認められた。このように経度や緯度と相関があることは、第四紀洪積世における気候変動が地理的変異を作り出していることを示唆する。

短報

富山市八尾町西神通産の軟体動物化石 (予報)

田中 豊

富山市八尾町西神通地内より産した軟体動物化石について報告する。この地域の神通川沿いでは音川累層の一部が連続的に観察でき、多くの化石を産することで知られていた。しかし近年では環境整備などの影響で露頭が減少し、地層の観察や化石の採集が困難になってきている。このような状況のなか、今回、護岸工事中に多くの化石を採集することができ、タウエヌノメハマグリ、チタニビノスガイなどが産出した。

富山県新記録の植物 19

太田道人

トキワトラノオを富山県で始めて記録される植物として報告した。本種は、半日陰の崖に着生して生えるシダ植物である。主に関東地方から西日本にかけて分布し、今回の発見地である立山町下田(みさだ)は、北限地の栃木県日光市に次ぐ緯度にある。石澤岩央氏から寄贈された標本に基づいた。

富山湾における鯨類の記録 (2007)

南部久男

石川 創 (日本鯨類研究所)

山田 格・田島木綿子 (国立科学博物館動物研究部)

谷田部明子 (東京海洋大学大学院)・台蔵正一 (あすなろ目高文庫)

2007年に富山湾で確認した3例と2006年に確認した1例の鯨類について報告した。

- 1例目: ハナゴンドウ *Grampus griseus* (体長 201.5cm のオスの死体、2007年6月17日、氷見市仏生寺川下流)、
- 2例目: 種不明(ハナゴンドウ *Grampus griseus* の可能性がある) (50~60頭のイルカ群れ 2007年4月8日、富山市四方沖1km付近)
- 3例目: イシイルカ *Phocoenoides dalli* (全長 150cm の死体、2007年5月17日、氷見泊)
- 4例目: 種不明クジラ類 (尾椎1個、2006年12月4日、氷見市窪の海岸)

今回確認されたハナゴンドウとイシイルカは富山湾では既知種である。

東海北陸自動車道(富山県南砺市)で交通事故死したニホンツキノワグマの 年齢

南部久男

後藤優介 (立山カルデラ砂防博物館)

2006年9月2日、富山県南砺市田下(旧上平村)の東海自動車道上り線で、乗用車と衝突し死亡した、体重49kg、全長1290mmのメスの第二前臼歯を用い年齢査定を行った。本個体は満10才であった。

立山における酸性雨観測結果 2006

朴木英治

渡辺幸一 (富山県立大学)

2003年から開始した立山の標高別の酸性雨観測について、2006年分の観測結果を報告した。観測地点は、桂台、美女平、上ノ小平、弘法平、美女平、美松坂、室堂平の7カ所で、これに、富山市市街地に位置する科学博物館屋上での観測値を加えて比較した。観測期間は7月26日～11月10日で、途中、美松坂、室堂平は10月10日に撤収、上ノ小平、弘法平、弥陀ヶ原は10月18日に撤収した。2006年の観測では、降水のpHには標高に対する規則性が見られず、8月のpHは4.49(美女平)～4.77(桂台)、9月は4.82(桂台)～5.07(科学博物館)で、8月分はやや酸性雨が強めであったが、全般に問題となる程度ではなかった。

資料

平成19年(2007年)能登半島地震の際に生じた 富山県内の液状化現象

田中 豊・市川真史

2007年3月25日、北陸を中心とした強い地震が発生した。富山県内でも富山市などで震度5弱のゆれを観測し、県内各地で落石、地割れ、ガケ崩れ、建物のひび割れ、水道管の破裂、ブロック塀や墓石の倒壊などの被害が出た。氷見漁港と伏木外港(高岡伏木万葉埠頭)では液状化による噴砂が発生した。2地点は液状化限界震央距離を超えた地点であった。液状化には埋立地という土地条件が関与していると思われる。

都市河川「いたち川」の護岸上に生育する植物リスト

太田道人

富山市街地を流れ、市民によく親しまれている「いたち川」護岸(長さ3km)から、ソメイヨシノやシダレヤナギなど248種類の植物が記録された。65.7%は栽培されているもので、29.8%は野生種、いわゆる雑草であった。4.4%のものは栽培種が野生化しつつある状態と考えられた。春期の調査の情報が不足しているが、花ごよみの基本データを作成した。

1953年の富山県におけるツキノワグマの大量出沒記

南部久男

1953年の富山県のツキノワグマの大量出沒データを地元新聞から抽出し、出沒状況をまとめた。出沒は県中央部から県東部の市町村でみられた。現在の合併前の市町村で示すと、神通川以東では、下新川郡の朝日町、入善町、魚津市、中新川郡の上市町、立山町、滑川市、上新川郡の大山町、大沢野町、富山市で、県中央部（神通川と庄川の間）では、富山市、射水郡小杉町、砺波市、婦負郡の婦中町、山田村、八尾町、細入村、大沢野町である。魚津市、上市町、大山町、大沢野町、八尾町で出沒が多く、これらの市町村では山地の広範囲の集落周辺で出沒がみられた。1953年の特徴は、海岸に近い平地（魚津市、滑川市、新湊市）で出沒がみられたことであった。

富山市におけるツキノワグマの出沒記録（2007年）

南部久男

2007年の富山市におけるツキノワグマの出沒状況を報告した。2007年の出沒状況は、富山市全体で45メッシュ（1メッシュは約1km×1km）、55件の出沒（実質件数）があった。大山と大沢野が10件を越し、八尾、山田、細入が5～10件で、婦中は1件と少なかつた。月別では、富山市全体で2～11月まで出沒がみられた。2～8月は、36メッシュ、41件で、9月～11月は12メッシュ、13件であった。出沒標高は100～750mの範囲で、2～8月は101～300m、9～11月は101～200mの範囲で出沒件数が多かった。

富山県のトンボ（2007年度記録）

二橋 亮（千葉県）・二橋弘之（富山県）・和田茂樹（福井県）

2007年（調査日数：二橋211日、和田18日）に、富山県のトンボ類に関して得られた知見を、採集・撮影記録とあわせて報告し、一部の種について簡単な解説を加えた。

南方系飛来種のアメイロトンボが（垣地ほか、2007）県内で初めて記録された。これにより県内の記録種数は87種になった。近年県内で記録のないホンサナエ、オナガサナエ、遠方からの飛来種であるオオギンヤンマ、スナアカネ、イソアカネ、ハネビロトンボ、生息地を未調査であるムツアカネおよび県内での産地に限られるアオサナエ、ムスジイトトンボ、タイリクアカネの10種を除いた77種が確認された。アオサナエは2006年に複数確認されているが、ムスジイトトンボは溜池の改修工事により昨年確認された産地が消滅し、タイリクアカネも2004年に1♂採集されて以来記録が途絶えている。